

論文審査の結果の要旨

氏名：小 林 玄 機

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：Continuous vs. Fixed 2-year Duration Immune Checkpoint Inhibitor Treatment of Patients With Non-Small Cell Lung Cancer: A Single Institution Database Analysis

(進行非小細胞肺癌における免疫チェックポイント阻害薬の適正投薬期間の後ろ向き検討)

審査委員：(主 査) 教授 櫻 井 裕 幸

(副 査) 教授 多 田 敬一郎 教授 増 田 しのぶ

教授 岡 村 行 泰

進行期非小細胞肺癌において、免疫チェックポイント阻害薬の登場は飛躍的な予後延長に寄与している。しかしながら、長期奏功例においてはいつまで治療を継続すべきであるかは議論のあるところである。本研究では、静岡県立がんセンターにおいて2019年8月31日までに、進行期非小細胞肺癌に対して免疫チェックポイント阻害薬を含んだレジメンで治療を受けた症例425名のうち、病勢の増悪がなく2年以上治療が継続された症例41例を対象とし、2年間治療された群と2年を超えて治療された群の2群間で比較し予後への影響を後方視的に分析している。免疫チェックポイント阻害薬開始から無増悪生存期間中央値は50.8か月、免疫チェックポイント阻害薬開始から2年経過した時点を起点とした無増悪生存期間(TTF-24)中央値は48.3か月であった。2年間治療群と2年を超えて治療継続された群の2群間におけるTTF-24に有意差は認めなかった($p=0.0541$)が、2年を超えて治療継続された群で不良な傾向を認めた。2年を超えて治療を継続された群は有害毒性が増える傾向にあった。免疫チェックポイント阻害薬は著効例もある一方で、高額な薬剤であるため長期投与を行っている患者に休薬するか継続するかの判断が難しい場合も多く、本研究は後方視的な探索研究ではあるものの、免疫チェックポイント阻害薬の至適な治療期間を検討した有用な研究であり、よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

主論文はすでにClinical Lung Cancer誌(2022; IF 3.6)にアクセプトされ評価を受けている内容である。

以 上

令和6年2月28日